芭蕉の「権七にしめす」における杜甫の受容とその展開

曹　元　春

はじめに

芭蕉における杜甫の受容に関する従来の研究は、出典論の面ではかなり進んでいる。しかし、個々の杜詩と芭蕉の俳諧との内容的な関連を具体的に実証し、その精神的なかかわりを究明するという研究は、まだ十分には行われていないようである。本稿では、俳文「権七にしめす」を巡って、芭蕉が引用したり、下敷にしたりした杜詩と、それに関わっている芭蕉の句文を分析し、その両者の内容的なつながり、精神的なかかわりを探し出して、芭蕉は杜甫の物の考え方、表現のしかたをどう把握したのか、それをどう受け入れたのか、そして、それを自分なりにどのように俳諧に生かし、どのように展開したのかを検討しようと思う。

さて、芭蕉の「権七にしめす」という俳文は、貞享四年（一六八七）冬、三河国保美村に門人の杜国を訪ねた時の作である。この俳文は杜甫の七言律詩「示獠奴阿段」を何箇所も踏まえたものであって、これまで既に指摘されているように、「権七」は「獠奴阿段」に、「家僕何がし水木のために身をくるしめ、心をいため」は「稚子尋源獨不聞」に、「陶侃が胡奴をしたふ」は「曾驚陶侃胡奴異」によっている。筆者はこれらの指摘のほかにも、「権七にしめす」という俳文と杜詩「示獠奴阿段」は、地理的な状況もよく似ていること、また登場人物も類似点が多いなど、内容的にも、精神的にも深いつながりがあるようである。そして、芭蕉は杜詩を踏まえたうえに自分の俳諧の世界を創造したと思う。以下、杜律「示獠奴阿段」と芭蕉「権七にしめす」の内容を分析してこの問題を考察してみようと思う。

一

杜詩を大量に引用した芭蕉は、いったいどの本によって杜詩を学んだのであろうか。まず先学者の説をまとめ、この問

題について私の考えを述べておく。

おおむね先学者は、芭蕉が引用した杜詩の大部分は律詩であるということにもとづき、「熱田三歌仙」にある「三ッ般の舟深川の夜　芭蕉　菴住やひとり杜律を味ひて　叩端」という連句を例証として、芭蕉が読んだのは『杜律』だとし、この『杜律』は明の萬歴年間に福建の人邵傳（字は夢弼）の編纂し、同じ福建の人陳学樂（字は以成甫）の校訂した『杜律集解』五言律四巻、七言律二巻のことであると指摘している。

『杜律集解』六巻は、初刻が寛永二十年（一六四三）で、それ以後、萬治、寛文、貞享、元禄にかけて数度の翻刻があった。仁枝忠は、この本は注釋も適切簡明、分量も六冊という手頃であったため、かなり流布した本であったと言う。吉川幸次郎は「芭蕉と杜甫」（昭和三十七年六月　日本古典文学大系第四十五巻附録）で、次のような趣旨のことを述べている。「芭蕉が読んだのは、明の邵傳の『杜律七言集解二巻』、それに、訓点をつけた本であろうと言う。それは、寛文十年庚戌仲冬吉辰、寺町四条下町丸屋三郎によって、刊行されたものである。この時、芭蕉は二十七歳、まだ伊賀にいた。同じく邵傳の『杜律五言集解四巻』は、訓点者宇都宮由的の寛文壬子三月の跋のある本が刊行されている。それは翌々十二年のことで、芭蕉が二十九歳、はじめて江戸へ下った年である。芭蕉が読んでいた杜甫詩集、少なくともその一つは、この本である。」但し証拠は何も示されていない。

私は、吉川幸次郎の説に賛成である。その根拠を示す前に、この寛文十年と同十二年に刊行されている和刻本の『杜律集解』六巻の構成を明らかにしておく。七言の方に、「萬暦丁亥冬十月朔」の日付のある邵傳の序と陳学樂の刻序と六六山下人方　莘君聘甫の跋があり、五言の方には、陳学樂の刻序、それに宇都宮由的の跋がある。そして、邵傳の注は欄に囲まれた部分だけである。欄外には詩題の解釈、語句と典拠についての説明及び詩の意味など記されている。宇都宮由的の跋によると、欄外に載っているものは、実は宇都宮由的が講義のために調べて、記録していたものである。宇都宮由的は、『杜詩集註』、『杜詩千家註』、『杜詩分類註』などの諸家の注釈を詳細に引用している。この版本を、黒川洋一は「簡単な注をほどこした一種の俗書である。（『杜甫の研究』　創文社）」と言っているが、私は杜詩を研究するための学問的な本であると思う。

私はこの版本を参考にして芭蕉の俳諧と関連のある杜詩を検討している時に、二つの注目すべきことに気づいた。一つは芭蕉の引用したり、下敷にしたりした幾つかの杜詩は、直接に詩によったものではなくて、その詩についての注、すなわち『杜律集解』の集解をふまえたものだということである。

例えば芭蕉の「独よし野〻おくにたどりけるに」(『野ざらし紀行』)は杜甫の「題張氏隠居」という詩の集解『邵傳注』の「往幽僻地獨訪友生」(『杜律集解』七言巻上)によったものである。そして、「山を昇り坂を下るに秋の日既斜になれば」(『野ざらし紀行』)も同じ杜詩の集解『邵傳注』「及到林丘日已斜矣」によったものである。それから、「薬欄にいずれの花をくさ枕」(『曾良書留』)は杜甫の「賓至」の集解『邵傳注』の「花薬之欄也不専指芍薬、藉看花望其復来、情欵曲矣」(『杜律集解』七言巻上)をもとにして作ったものである。また、すでに指摘されている芭蕉の「すこぶる人をして深省を発せしむに、と吟じけむ、しばらく清浄の心をうるに〻たり。」(『鹿島詣』)は杜詩「遊龍門奉先寺」の集解『杜詩集註』「昔淵明聞遠公議論、謂人曰、令人頗発深省。今杜公、聞晨鐘、深有省悟。其得清浄之趣乎。」(『杜律集解』五言巻上)によったものである。『杜律集解』は訓点がついているので、たいへん読みやすい詩集であり、特にその詳しい集解は杜詩の理解に役立つのである。以上、挙げた例から分かるように、芭蕉の俳諧は『杜律集解』の集解にまで関わっている。それは芭蕉がこの詩集によって、杜詩を学んだという最も説得力のある根拠ではなかろうか。もう一つの気づきは、芭蕉が貞亨五年九月十日に吟じた「十日菊」と、続く十三日に吟じた「十三夜」に、それぞれ杜甫の「崔氏東山草堂」と「九日藍田崔氏荘」を引用していることである。この二首の杜詩は共に『杜律集解』七言巻上に収められ、前後の関係になっている。芭蕉がこの密接な関係になっている杜詩を、やはり前後の関係になっている句文に引用したのは偶然の一致であるとは思えない。これは芭蕉が『杜律集解』七言巻上によって、この二首の杜詩を読んだことを裏づけている。以上の二つの事柄によって、私は芭蕉は『杜律集解』によって杜詩を学んだにちがいないと考えている。

以下、この『杜律集解』を参照して、「示獠奴阿段」の語釈、典拠及び詩の意味を分析する。

示獠奴阿段

山木蒼蒼落日曛
竹竿裊裊細泉分
郡人入夜争餘瀝
稚子尋源獨不聞
病渇三更回白首
傳聲一注濕青雲
曾驚陶侃胡奴異
怖爾常穿虎豹群

獠奴阿段に示す

山木蒼蒼として落日曛じ
竹竿裊裊として細泉分る
郡人夜に入りて餘瀝を争ひ
稚子源を尋ねて獨り聞かしめず
渇を病みて三更白首を廻らし
聲を傳えて一注青雲を濕す
曾て驚く陶侃が胡奴の異なるに
怪む爾が常に虎豹の羣を穿つを

(解題)

獠奴阿段…「獠は南西の夷であって、阿段あるいは夷人と呼ばれた。それ故に杜甫は胡奴を以てたとえた。(南西夷名、

意阿段或夷人、故公以胡奴比之。)」『杜律集解』引『杜詩集註』『杜詩千家註』『杜詩分類註』『北史、蠻獠傳』に、「獠は氏族の区別もないし、名前もない。生まれた男女は唯長幼の次第によって呼ばれる。男性な阿、阿段、女性は阿姨、阿等などと呼ばれる(獠無氏族之別、又無名字、所生男女、惟以長幼次第呼之、其丈夫称阿阿段婦人称阿姨、阿等之類。)」とある。

曛…「曛は夕日の光餘をいう。(日人餘光也。)」『杜律集解』引『杜詩分類註』

裊裊…「裊裊は長く、弱々しい様子をいう。(長弱皃。)」――同上

竹竿細泉分…「夔州には井戸がない。竹筒をもって泉を引く。山腹をぐるぐるまわしている竹は数百丈もある。(夔無井竹引泉、蟠接山腹間、有數百丈者。)」――同上。

郡人…「夔州の人を指す。(夔人)」『杜律集解』引『邵傳注』

稚子…「獠奴のこと。(獠奴)」――同上。

源…「源は泉の源をいう。(泉之源也)」――同上。

病渴…「杜甫は消渴病(糖尿病)があった。(公有消渴病)」『杜律集解』引『杜詩分類註』

傳聲…「水の音が伝わってくる。(傳來水声也。)」――同上。

注…「水が流出する様子である。(水流射皃。)」――同上。

湿…「字を使うのは巧みである。(用字巧。)」『杜律集解』引『邵傳注』

濕青雲…「巫峽山は高くて、並びに青雲が出る。源泉が高い山から流れ注いできたので、青雲も潤される。(巫峽山高、並出青雲、源泉自高山而瀉下、故青雲亦沾湿也。)」『杜律集解』引『杜詩分類註』

胡奴…「陶侃の家には、奴僕が千人余りいたが、かつて、一人の胡奴を得た。その胡奴は無口で、いつも黙って坐っていた。ある日、侃が郊外に出かける時、その胡奴は鞭を持って、侃について行った。ある胡僧がその胡奴を見ると、驚いて礼をして言う。これは海山の使者である。侃が不思議に思った。その日の夜中になると、胡奴がいなくなった。(陶侃家僮千餘人、嘗得胡奴。不喜言、常黙巫。侃一日出郊奴執鞭以随、胡僧見而驚、礼云、此海山使者也。侃異之。至夜失奴所在)」――同上。

陶侃…「陶侃は字が子衡であって、晋の成帝の咸和年、交廣、荆江などの八州の軍事を都督して、長沙公に封ぜられた。年七十六才でなくなった。(侃字士衡、晋成帝咸和中、都督交廣荆江等、八州軍事、封長沙公、年七十六薨。)」――同上。

「示獠奴阿段」の詩意は次のごとくである。

「山の樹木の色が濃緑色で、夕日が沈んで、辺りがうすれて暗くなったのに、暑さがまだ残っている。この時、長く、弱々しい竹竿から細々とした泉水がいくつかに分かれて流れる。

郡の人たちは夜になると、その残ったしづくを我がちに争って汲み合う。だが、自分のしもべはこの争いをよそにして、独りで山奥の源を探しに行った。夜中に、自分は病渇（糖尿病）でたまらなくて、幾度も白髪の頭を出して見渡した。突然、さっと一聾水音がして、まるで青雲を潤してきたような水が高い所から注いできた。自分は昔、陶侃の胡奴が凡人と違って、普通の人ができないことをやったのに驚いたことがある。おまえがよく虎豹の群れの中を分け入って歩くのも不思議にたえず関心しているのである。」

詩の一、二句は山の草木の生い茂っている状態、夕方になった景色を述べて、暗夜でも深山、林を歩くことができ、猛獣を恐れない阿段の登場のために、伏線を敷いた。三、四句は対比の表現手法で、阿段が郡の人々と全く違って、小さい利益を争わないというすぐれた品質を示した。五句は夜中に帰ってこない阿段を心配する気持を述べ、六句は誇張の手法で、阿段に引かれてきた泉水を描写して、喜びの気持を表した。七、八句は晋の陶侃の胡奴の典拠を借りて、阿段が忠実、勇敢で、凡人と違うところを高く評価した。

この「示獠奴阿段」詩は、大暦元年（七六六）の初夏、杜甫が雲安から州に来たばかりの頃、作ったものである。四川省文史研究館の編集した『杜甫年譜』によると、

到夔州後、居於山腰、前臨大江、白帝城在其東。第一步工作、即按照、夔州人民習慣、以竹筒、従山高處引泉水、人厨下、以供取用。因夔俗山居不能掘井、惟頼竹筒引水而飲、蟠繞山腹間、至數百丈者。杜甫為此、遣僕人阿段、走入深山、尋求水源。因而作有「引水」及「示獠奴阿段」詩言之。

ということである。この文の意味は、杜甫が夔州に来て、山腹に住み着いた、その場所は長江に向かい、その東に白帝城があった。住所に入ると、すぐに夔州の人々の習慣に従って、山の高い所から竹筒で泉水を台所まで引いて、使用に供するようにした。夔州は山地で、井戸を掘ることができない。水はただ竹筒で引いてくるのによるだけである。山腹をぐるぐるまわしている竹筒は数百丈のものもある。飲水が乏しいため、杜甫は僕人の阿段を源を探しに行かせた。このことは「引水」、「示獠奴阿段」という詩に記されている、というものである。

杜甫がその前に住んでいた雲安と、この度住むことになった夔州はみな乏水地帯である。杜甫の「引水」という詩は、その両地の飲水の難儀さをありのままに記している。

引水　　水を引く

月峡瞿塘雲作頂　　月峡　瞿塘　雲を頂と作す
亂石崢嶸俗無井　　亂石崢嶸として俗に井無し
雲安沽水奴僕悲　　雲安　水を沽うて　奴僕悲しみ

魚復移居心力省　　魚復　居を移して心力　省く
白帝城西萬竹蟠　　白帝城西　萬竹蟠る
接筒引水喉不乾　　筒を接して水を引き　喉は乾かず
人生留滯生理難　　人生留滯　生理難し
斗水何直百憂寛　　斗水何ぞ直らむ　百憂の寛なるに

詩の一、二句は雲安、夔州の地形的な状況を紹介して、月峽（雲安の近くにある）も瞿塘も雲がその頂をなしており、岩石が固く乱れ立って、そこには、井戸というものがないという。三、四句は飲水の乏しさを述べた。月峽のある雲安では、水を買って飲まなければならない。その上、道がはるかに遠いので、僕人たちは悲しんだが、瞿塘の魚復浦へ引っ越してからは水にかけての心配も力わざも省けるようになった。五、六句は、夔州で水を手に入れる方法を説明した。それは白帝城の西に幾萬本の竹が生えているから、それを切って竹筒をつなぎあわせて、水を遠くから引いてくるので、喉が乾くことがなくなったのだという。七、八句は漂泊の悲しみを嘆いた。ただ人生他郷に滞在していては暮らし向きが難儀であって、自分の心の中のさまざまの憂えの分量から見ると、一斗の水の量も比べものにはならないほどのものであると。これによれば、杜甫の住んでいた雲安も夔州も非常に水に乏しい所であるが、夔州の状況は雲安より少々よさそうである。

「示獠奴阿段」という詩は邵傳が「僕子遠修水筒、情示妙絶、非此老不能此詩。」と指摘した如く、奴僕の阿段が危険を冒して深山に入り、泉水を引く竹筒の破損を修理した功労を誉め讃えたものである。『杜甫年譜』によると、杜甫は夔州にいる間、奴僕――阿段、信行、伯夷、辛秀、女僕阿稽などを持っていたということである。明の王嗣奭は、

伯夷、辛秀等、稱為隷人。似柏公官丁以充使令者。（『杜臆』巻十六）

と記している。柏公とは夔州の都督柏茂琳を指す。杜甫は夔州にいる間、柏茂琳に厚く待遇されていた。王嗣奭の文の意味は、伯夷、辛秀などはみな隷人と呼ばれているが、柏茂琳が兵士を僕人として、杜甫の所に遣したようであるというのである。獠奴阿段も伯夷、辛秀などと同じように伯茂琳によって遣わされたものかもしれない。『新唐書』南蠻列伝によれば、西南夷は唐の時代、主に夔州（今の涼山州）、戎州（今の雷波、馬辺と屏山の地域）に棲んでいた。では、どうして阿段は故郷をはるかに離れて、夔州に来たのであろうか。玄宗の天宝十年から、阿段が杜詩に登場する大暦元年の頃まで、安禄山の反乱をはじめとする内乱と西戎の侵入がたえず続いていた。阿段が夔州に漂泊した理由は三つの面から考えられる。一つは、もともと阿段は西夷の軍隊の兵士であったが、唐の王朝の軍隊に捕えられ、後に夔州府の都督柏茂琳の兵士にされて、柏茂琳に奴僕として、杜甫の所に派遣された兵士

の一人か、一つは、阿段は唐の王朝の軍隊に徴兵された人であって、柏茂琳が杜甫の所に行かせたのか。あるいは連年の戦争で百姓の生活がたいへん苦しいので、阿段は生計のために、当時わりに生活しやすい成都をめざして、夔州に漂泊してきたものか。いずれにせよ、阿段の漂泊者のイメージははっきりしている。

「示獠奴阿段」詩のほかに、阿段はまた「竪子至」「駆竪子摘蒼耳」、「秋行官張望督促渚耗稲向清晨遣女奴阿稽竪子阿段往問」などの詩にも登場する。これらの詩に描かれた阿段のイメージはすべて忠実、勤勉、勇敢である。ところで、獠は西南夷の一種であって、その当時、南蛮別種と呼ばれて、漢民族に軽蔑され、差別された人種である。そのうえ、天宝十年から西南夷が絶えず、中原に侵入していたので、漢民族に嫌われ、恨まれていた。それにもかかわらず、杜甫は大胆にこれらの身分の低い人たちのすぐれた品性を賛め讃えた。これは一般の詩人にはできないことではなかろうか。

杜甫が生涯のうち、官吏をしていた時間は合わせて四年間にも満たなかった。閑居の時間が長かったし、生計も苦しかった。そういうわけで、社会のどん底の農民たちと交際する機会が多かった。旅行、漂泊の時にも、村に閑居したり、農作業にたずさわったりする時にも、杜甫は積極的に、広く農民たちと付き合った。そして、彼らとは深い友情に結ばれていた。身分の低い人が持っている正直で、素朴な人柄をよく知っていた。杜甫は「負薪行」、「最能行」、「信行遠修水筒」、「遭田父泥飲厳中丞」などの詩で、身分の低い人のことを描くことが多く、そのために今でも人民詩人と呼ばれている。劉昫は『舊唐書』文苑伝で、

甫於成都浣花里、種竹植樹、結廬枕江、縦酒嘯詠。田夫野老、相狎蕩、無拘、厳武過之、有時不冠、其傲誕如此。

杜甫は成都の浣花里で、竹と木を植え、浣花渓のそばに家を建てて、縦飲したり、嘯詠したりした。そして、田夫、野老とねんごろにして、勝手気ままであった。厳武（成都尹兼剣南節度使）が訪ねた時、帽子をかぶらないこともあった。その傲慢、不遜さはかくの如くである。」と、杜甫のことを批判しているが、しかし劉昫の杜甫の対するこの批判によって逆に、杜甫が身分によって、人間を差別しなかったこと、身分の低い人々と親しく付き合ったということが分かる。杜甫は「示獠奴阿段」においても、阿段の身分の低いことにこだわらずに、その品性のすぐれたことを人々に伝えようとしているのである。

二

「示獠奴阿段」を下敷にして、「権七にしめす」を作った芭蕉は、この杜詩をどう把握し、そして阿段のイメージをど

う捉えたのであろうか。「権七にしめす」を分析しながら、それを考えてみたい。

権七にしめす

旧里を去て、しばらく田野に身をさすらふ人あり。家僕何がし、水木のために身をくるしめ、心をいたましめ、其獠奴阿段が功をあらそひ、陶侃が胡奴をしたふ。まことや、道ハ其人を取べからず。物ハそのかたちにあらず、「下位に有ても上智の人あり」といへり。猶石心鉄肝たゆむ事なかれ。主も其の善のわするべからず。

祝

先いわへ梅をこゝろの冬籠　芭蕉

『校本芭蕉全集、文巻』によると、この俳文は巴静編『刷毛序』（宝永三年刊）に「権七にしめす」という題で載っている。以下『松尾芭蕉全集』（小学館48・6）を参考にして、俳文の意味を考察してみよう。この文の意味は次のようである。

故郷を出て、しばらく辺鄙な田舎にさすらっている人がある。その家僕某が薪や水のために、骨身を惜しまず、苦労して、こまごまと主人のために心を使い、杜甫のために危険な山に入って、水を求めてくれた忠僕で、獠奴の出身の阿段と、その忠実さを競い、また晋の名将陶侃に仕えた胡出身の下僕の心を慕っている。まことに道を行うということは人の貴賤上下にはかかわりがない。物はその外面の形ではなく、その心なのである。『たとえ地位は低くても、天性、道を知っている聖者がある』と言われているとおりである。なお、この上とも、その固い志をゆるめることなく、精励してもらいたい。主人もまた、この家僕の善行を忘れるようなことがあってはならない。

祝

先いわへ梅をこゝろの冬籠

句の意は、「不運にして、このように、片田舎に隠れ住んでいるそなたであるが、やがて時がくればまた大手を振って世間に出られるのだから、あの、寒さの中でも春を知っていて香りよく咲き出す梅を心に置いて、時節を待って静かに冬籠もりするがいい。それに忠実この上ない家僕もいることだし、まずはめでたいことである。」というものであろう。

この俳文は題目から見ると、杜国の下男――権七に与えたものであると思われるが、内容を分析すると、実は杜国とその下男の両名に向かって書いたものであるということが分かる。「権七」は奴隷の汎称（校本芭蕉全集六、尾形仂説）である。そして、この人物は虚構的な人ではなくて、実存の人であると言われる。大礒義雄は『杜国新考（二）』（『愛知学芸大学研究報告』第二輯。昭28・3）において、権七につい

て、論じておられるが、すなわち、権七は保美の出身の家田与八のことであって、名古屋に出て、杜国に仕え、後、杜国を伴って帰郷して、その世話をしたということである。そして、それによると、家田与八という人は保美に菩提寺を持って、苗字も持っていたという。江戸時代、名字を名乗ることは武士及び町人、農民のうち由緒ある家柄や功労者に許された特権であった。それで、家田与八はかなり財産を持っていた豪農であると推定される。しかし、この身分は芭蕉に描かれた名もない「下位」の権七のイメージと全然合わないのである。豪農の家田与八であるならば、不遇な主人――杜国のために権七のような下男を雇うぐらいのことはできるはずである。自ら薪を切ったり、水を取ったりする必要はまったくなかろう。どうも、家田与八が権七のことであるという推定は納得できない。

権七はどこの出身か、よく分からないが、とにかく、名も知られない下僕であって、恐らく「保美の当地の人ではなかった」（赤羽学『続芭蕉俳諧の精神』清水弘文堂）。この俳文の中では、忠実、勤勉、勇敢なる阿段陶侃の非凡なる胡奴に譬えられ、下位にありながら、人間的にすぐれた代表として描かれている。すぐれた人間は身分の高低によるものではなくて、その心によって認められるのであり、身分が低くても、優秀な品性を持つ人もいる。これは「権七にしめす」の要点であると思う。芭蕉の「道は其人を取べからず。物はそのかたちにあらず。下位に有ても上智の人あり」という文によって、その身分差を超えた精神が見える。この精神は貞享元年九月、大和の竹内で書かれた「竹の奥」という俳文にも現れている。すなわち、

竹の奥

大和の国、竹内と云処に日比とゞまり侍るに、其里の長也ける人、朝夕間来て旅の愁を慰めらし。誠その人は尋常にあらず。心は高きに遊んで、身は芻蕘雉兎の交をなし、自鋤を荷て淵明が園に分入、牛を引ては箕山の隠士を伴ふ。且、其職を勤て職に倦ず。家は貧しきを悦てまどしきに似たり。唯是、市中に閑を偸て閑を得たらん人は、此長ならん。

綿弓や琵琶に慰む竹のおく　蕉散人桃青

文の中にある「芻蕘雉兎」は、すでに指摘されたように、『孟子』梁恵王下篇に、

文王之囿、方七十里。芻蕘者往焉。雉兎者往焉。与民同之。民以為小不亦宜乎。

とあるのによる。すなわち、文王の狩場は七十里あっても、草刈り、木伐りも狩人も自由にその中に入れたし、草を刈ったり、木を伐りだしたり、雉子や兎を捕ったりしてもよかったのである。つまり文王はそれを独占しないで、人民と共有

していたのである。人民がまだ狭すぎると思うのも、尤もではないか、というのである。これは、斉の宣王が、文王の囿が七十里もあって人民はこれを狭いとし、自分の囿が方四十里であるのに人民はこれを大きいとするのは何故かと孟子に問うたのに対し、孟子が答えた話の一部分である。周の文王と斉の宣王は民に対して、全く違う態度を取った。文王の場合は、身分の貴賤をとわず、民と楽しみを共にすべきだという態度を示したのに対して、宣王は自分のことを高く民の上に置いて、御苑に身分の卑しい民が出入りすることを許さなかった。そればかりではなく、御苑の中の鹿を殺したものは人を殺したのと同じ罪で、民の自由を許さなかった。身分の低い人の命は王の鹿の命に及ばないというひどい身分差別で民を扱ったという態度である。ここにおいて、孟子の主張は身分の高い王にせよ、身分の卑しい民にせよ、身分差別をなくして、楽しみを同じくすべきだということである。芭蕉はこの主張に心を引かれたのであろう。「身は芻蕘雉兎の」について、赤羽学は『芭蕉俳諧の精神――拾遺』（清水弘文堂）では次のように論説されている。

「身は芻蕘雉兎の」は、『笈の小文』の「身は風葉の」と同じで、身は芻蕘雉兎であるの意味に解さなければならない。竹の内の村長は、身を芻蕘雉兎と同列とみなし、それらと同じ交りを結んでいたというのが芭蕉の真意である。文王が七十里の囿を民衆と共有したという『孟子』の文を芭蕉が引いたのは、芭蕉自身俗と共にあるという信念に生きたからである。

すなわち、芭蕉は人間が身分によって差別してはいけないと考え方を持っていたのである。

「先いわへ梅をこゝろの冬籠」という発句は芭蕉が愛弟子――杜国のために書いたものである。これは不遇な杜国に同情し、慰め、その前途を祝ったのである。杜国は坪井氏であて、通称は庄兵衛である。名古屋の米穀商で、町代も勤めた富裕な町人であった。芭蕉に入門したのは貞享元年（一六八四）の頃であって、『冬の日』五歌仙の連衆の人である。越人の後年の著『鵲尾冠』（享保二年刊）によれば、杜国は少年にして早くも機知、才気に富んでいた。この才能の豊かな杜国は貞享二年（一六八五）八月十九日、御禁制の空米売買（米相場）に手を出して、御領分追放、家財没収の刑を受け、名も南彦左衛門と改めて、保美村に蟄居した。支考は、

杜国は故翁（芭蕉）の愛弟子なるに、不幸短命の嘆あり。（『本朝文鑑』日記類庚干紀行の注）

と、記しているが、確かに芭蕉は杜国に常と異なる感情を抱いていたようであって、作品の中では、幾度も杜国のことに言及している。

白芥子に羽もぐ蝶の形見哉　『甲子吟行』

これは貞亨二年夏の作であるが、杜国の空米売買事件の後に書かれたものではないかという疑問があった。この句は若い杜国を美しい白芥子に、旅に漂う芭蕉自身を花から花に飛び移る蝶に見立てて、痛ましいほどに離別の悲しみを表した。そして、貞亨四年（一六八七）十月から翌年へかけての上方の旅行について、芭蕉は、

三川の国保美という処に、杜国がしのびて有けるをとぶらはむと、まづ越人に消息して、鳴海より後ざまに二十五里尋かへりて、其夜吉田に止まる。『笈の小文』

と書いているが、この文から芭蕉が旅の途次、わざわざ九十キロ余りの道を後戻りして、保美の杜国を訪ねたことが分かる。芭蕉は保美に滞在する間に、杜国に関して、次のような句を作った。

鷹ひとつ見付けてうれしいらこ崎　『笈の小文』

杜国が不幸を伊良古崎に訪ねて、鷹の声を折ふし聞きて

夢よりも現の鷹ぞ頼もしき　『鵲尾冠』

さればこそ荒れたきまゝの霜の宿　『曠野』

麦生えてよき隠れ家や畠村　『笈の小文』

先祝へ梅の心の冬籠り　『曠野』

それから、貞亨五年二月、杜国を吉野への行脚にさそっており、また貞亨五年四月二十五日の猿雖宛芭蕉書簡には「万菊丸軒の図」が描かれている。「万菊丸」は杜国の別号である。元禄三年正月十七日には、杜国からの便りの絶えたのを心配して、

いかにしてか便も無御座候。若は渡海の船や打われけ、病変やふりわきけんなど方寸を砕而已候。云々（萬菊丸（杜国）宛）

と、状を書き送って、痛々しいまでの憂慮が感じられる。そうして芭蕉の憂慮は現実となり、杜国はこの年の春三月二十日追放された先――保美で永逝した。享年三十数歳であった。芭蕉の杜国の死に対する悲しみは、元禄四年五月四日に書かれた『嵯峨日記』から窺える。

夢に杜国が事をいひ出して、涕泣して覚。（中略）誠に此ものを夢見ること謂所念夢也。我に志深く伊陽旧里迄したふ来りて、夜ハ床を同じう起伏、行脚の労をともにたすけて、百日が程かげのごとくにともなふ。ある時ハたはぶれ、ある時は悲しび、其志我心裏を染て、忘るゝ事なければなるべし。覚て又袂をしぼる。

門人の中で、これほど芭蕉に愛情を注がれたのは杜国しかいなかった。それでは、どうして芭蕉はこんなに杜国を愛したのであろうか。『芭蕉講座第七巻書簡篇』の荻野清の説によると、「世上まゝ衆道に依て結ばれたものではあるまいかとの推測も行われておるが、たまたま二人の性格的な一致が、

異常と思へるほど強度な愛を培ふに至ったのだと見て置きたい。」ということである。私はそれよりむしろ、杜国の不遇に同情する気持からであると思う。以上に述べたごとく、杜国に関わる芭蕉の句とか、文などは「白芥子の羽もぐ蝶の形見哉」の一句のほかは、全部確実に杜国が不幸になって後に、書かれたものである。そして、これらの句と文は明らかに芭蕉が杜国に対する憂慮、同情、慰めを表している。それ故に、芭蕉の杜国への異常なまでの愛情は、その不遇と漂泊に同情する立場からのものであろうと考えられる。

三

俳文「権七にしめす」は杜市「示獠奴阿段」の表現法を模倣し、その詩情を背景に含みこんで、内容的にも精神的にも深くつながっている。また、そればかりでなく、文章の構造の面でも、内容の面でも、芭蕉は自分なりの表現法と考え方によって、「権七にしめす」という俳文を完成したのである。

まず表現方法を見てみよう。「権七にしめす」という題は明らかに「示獠奴阿段（獠奴阿段にしめす）」という詩題の模倣である。「示獠奴阿段」のように「示――」という題目の詩は『杜律集解』では、そのほかにまだ三首ある。それは「示宗文宗武」、「送蜀州栢二因示従弟位」、「示姪佐」である。自分の息子に、そして、いとこに、甥に「示した」ものである。すなわち、それは全て目下の人に「示す」のである。芭蕉も下男の権七に「示す」のであるから、この点では、芭蕉は杜甫の影響を受けている。登場人物の描き方についても、杜甫の典拠をふまえて、人物を描写する手法を受け入れた。杜甫が陶侃胡奴の典拠を引用して阿段を描いたのは、阿段が陶侃の凡人ならざる胡奴と同じように主人に忠実に奉仕して、勇敢であることを言い表そうとしたのである。芭蕉は権七のことを典拠の中の獠奴阿段と陶侃胡奴に譬えて描き、権七が主人に忠実に尽くして、勇敢であるところはこの二人に似ていて、勤勉であるところは阿段のごとくであると、言い表そうとした。自分の文章に典拠を引用するのは典拠を借りて、自分の主張と思想を言い表すためである。こういう表現法は古くからあり、『文心雕龍』では、これを「事類（第三十八）」と呼んでいる。そこには、「事類者、蓋文章之外、据事以類義、援古以証今者也。」とある。すなわち、事類というものは、思うに文章の外にあり、事によって類義し、古を引いて今を証するということである。芭蕉も同じように典拠を引用するのは俳文を潤飾するためではなく、自分が杜甫と同じ考え方を持っていることを言い表そうとしたのである。しかし、芭蕉は単なる表現法の模倣だけに止まらなかった。構造の面において、「示獠奴阿段」はただ、阿段のことを書いた単一的な構造のものであるが、「権七にしめす」は権七とその主

人杜国の二人のことを書いた二段の構造からなっている。これは芭蕉が杜甫の表現のしかたを鋳型にしたうえに更に自分なりの思いを加えているのであり、新しい展開である。

次に両者の内容的な関連と違いを見よう。

杜甫の「示獠奴阿段」詩に芭蕉が感動させられた原因は、この杜詩が下位の人のすぐれた品性を称揚したところにあると思う。「権七にしめす」の「道は其人を取べからず。また、物はそのかたちにあらず。下位に有ても上智の人あり」の一文から「示獠奴阿段」詩の主題を正しく捉えていたことが分かる。阿段、陶侃の胡奴の持っていた忠実、勤労、勇敢の美徳を権七の身の上に生かしたのは、阿段のイメージを正しく把握していたからである。人間は身分の貴賤によって見るべきではないという点では杜甫と芭蕉は精神的につながっているといえよう。ところで、「示獠奴阿段」詩の方は、ただ阿段の功労を誉めただけであるのに対して、「権七にしめす」は権七の功労を誉めたのみならず、その主人――杜国への慰め、励ましも書かれている。芭蕉の「権七にしめす」は身分の低い人のすぐれた品性を誉め讃えた上に、不遇になって漂泊している人に対する同情の精神も表された。これは両者の異なっているところであり、芭蕉の自分なりの考え方による創造である。

芭蕉は杜甫と同じように平生、不幸な人々に、深い同情を持ち、特に政治的に失脚した人々に対してそうであった。芭蕉の俳諧に登場する菅原道真、源義仲、源義経、後醍醐天皇などが、みなそういう不幸にあった人物である。更に、芭蕉の敬愛した中国の詩人、杜甫、李白、白楽天、蘇東坡らも政治的に不遇な立場に置かれ、故郷を遠く離れて、各地を漂泊していた人々である。芭蕉は若い頃、同じような不幸なことがあったのであろう。『幻住庵記』（元禄三年七月）では、芭蕉は自分の生涯を振り返って次のように述べている。

倩年月の移こし拙き身の科をおもうに、ある時は仕官懸命の地をうらやミ、一たびハ仏籬祖室の扉に入らむとせしも、たどりたき風雲に身をせめ、花鳥に情を労じて、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして、此一筋につながる。

この文から、芭蕉は一時期主君に仕えて、禄を得、立身出世をしようとしたことが窺える。竹人の『全伝』には「幼弱の頃より藤堂主計良忠蟬吟子につかへ、愛寵頗る他に異なり」とある。これによって、芭蕉は幼い頃から、藤堂藩の伊賀付士大将で、五千石を食んでいた藤堂新七郎家に出仕した。仕えたのは当主良精ではなく、その嗣子良忠であった。良忠の「愛寵は頗他に異な」るものであったが、芭蕉二十三歳の春、主人の良忠は二十五歳の若さで、病歿した。良忠のあとに嗣子に据えらえたのはその弟の五良左衛門良重である。良重は

十歳で別家し、十八歳で本家に戻ってきたわけだが、自分付きの家来を連れて、本家に戻ってきたであろう。芭蕉は致仕を乞うたが、許されなかったという旧説があるけれども、井本農一氏の「芭蕉評伝」(『校本芭蕉全集』富士見書房)には「死んだ良忠に直属していた人々のうち、配置転換されて残ったものもいたであろうが、何人かは必ず不要になる。藤堂新七郎家も内状は決してらくな経済状態ではなかった。その上、寛文六年(一六六六)は飢饉であった。すぐやめろとはいわれないとしても、何となく居心地が悪くなることは当然考えられる。中でも特に良忠に親炙していた者の立場は微妙である。芭蕉はやめろとはいわれなかったかもしれないが、やめざるを得ないような立場にいたのではあるまいか。」とある。いずれにせよ、芭蕉は主人良忠の死によって、不遇になったことは事実である。藤堂新七郎家を出た芭蕉はさしずめ兄の食客である。下級武士の兄の家の生活は裕福な生活ではなかった。何とかして、世の中へ出て自立しようと芭蕉は強く思ったであろう。芭蕉は京都に出てみた。「彼の上京は特に志した目的があったのではなく、単に仕官の素地として、一般的な学問修業をするといふ位のものであったろう。そして将来、武士階級の間にあって身を立つべき計をなすものであったにちがひない。」と頴原退蔵氏は『頴原退蔵著作集第九巻』(中央公論社)に書いている。しかし、あれやこれやと試行錯誤をくり返してみたが、武士としての立身出世の道は結局、芭蕉の前に開かれていなかった。若い時にこのような不幸なことがあった芭蕉は、不遇によって漂泊している人々の身の上に、漂泊者としての共感を抱いたのであろう。

芭蕉は『奥の細道』の冒頭文では、

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいずれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、(下略)。

と書いている。「片雲の風にさそはれて」は杜甫の「片雲天共遠」(「江漢」)によって書いたものであり、「古人も多く旅に死せるあり。」は杜甫のことも含んで書いている。すなわち、この冒頭文では芭蕉は杜甫を漂泊の先人として見ていたこと、自分の漂泊は古人のそれに誘われたものであることを告白しているのである。そして、芭蕉は杜甫、杜国、そして獠奴阿段と下男の権七を、同一的な視点すなわち漂泊者として見ていたことが「権七にしめす」によって、分かる。

芭蕉が「示獠奴阿段」詩を下敷にして杜国とその下男のことを書いたのは何故か。ここでそのきっかけについて、考えてみよう。一つは杜国の境遇は多少、杜甫に似ていたことが考えられる。二人ともやむをえず郷里をはるかに離れて、辺

鄙な田舎にさすらっていた。その不遇の性質は違うが、漂泊者であるという点では共通している。そして、杜国の俳号は杜甫を慕うことで、芭蕉によってつけられたかもしれない。もう一つは、杜国の下男――権七と、杜甫の奴僕――阿段とは類似した点が多い、ということがある。阿段も権七も名も知られぬ奴僕である。阿段は中国の西南地方から遠く離れた夔州に漂泊してきた夷人である。それに対して、権七はどうであろう。権七も恐らく「保美の当地の人ではなかった。」と指摘されている。また、阿段も権七も主人に忠実に奉仕して、勤勉で、勇敢であった。

もう一つ重要なきっかけが考えられる。これは中国四川省の夔州と渥美半島の保美村とがみな乏水の地帯だということである。伊藤郷平氏の『渥美半島の農業地域構造第二報』（『愛知学芸大学研究報告』第一輯昭27・3）によれば、渥美半島は「乏水性の洪積地面で、乾燥性畑地業地域である。」という。稲も作れない土地である。芭蕉が保美の隣村――畠村で、吟じた「麦はえてよきかくれ家や畠村」ととという句も水の乏しい村ということを裏づける。そして、『合歓のいびき』所収の芭蕉真蹟に載っている「ゆきや砂むまより落よ酒の酔」という句からも、その土地の乾燥した状態が想像される。ここの住民はどのようにして飲水を取るのか分からないが、「家僕何がし水木のために身をくるしめ、心をいたましめ」という文の内容から、その難儀さを察することができる。たぶん杜詩の竹竿を伝わる細泉を人々が争って汲んだような状態に劣らないほどであったろう。芭蕉は杜国を訪ねるために保美に行って、その土地の乏水の状況を知った。そして、主人のために骨身を惜しまず、水を取ってくる権七を見て、その献身的な精神に感動させられて、思わずこの権七のことを賛美しようとする気持ちが湧いてきた。杜律に親しんだ芭蕉はごく自然に目の前にいる杜国から、杜甫の身の上、権七から阿段のことが思い出された。そして、乏水の地帯である保美から、「示獠奴阿段」（『杜律集解』）の集解によって読んだ「夔無井、竹引泉」という井戸もない夔州のことが連想された。こうして芭蕉は、杜甫、獠奴阿段、夔州の乏水な状況を背景において、一つの構想を練ったのであろう。

「示獠奴阿段」は芭蕉に愛読された杜詩の一首であった。芭蕉は「権七にしめす」だけではなくて、『奥の細道』の旅の途中――羽黒では、この詩の第六句「傳聲一注濕青雲」を模倣して、「青雲の滴をうけて、筧の水とをくめぐらせ」（「天宥法印追悼」）と書いた。旅の途中でも正しく杜詩を引いたことから、「示獠奴阿段」が暗誦されるほど記憶されていたことが分かる。

さて、もし芭蕉が、保美に不遇の杜国を訪ねに行ったこと、その下男が主人のために忠実に奉仕したことを杜甫の「示獠

奴阿段」とむすびつけないで描くとしたら、この俳文はどう書かれたであろうか。恐らく、今のように人々を感動させる魅力を失ったことであろう。芭蕉は権七を阿段、陶侃の胡奴に譬えることによって、古典を現実の中に蘇らせた。「示獠奴阿段」を知っている読者なら自然に権七を阿段と重ねて考える。そうして権七のイメージが生き生きとして顕れてくる。芭蕉の描いた現在は単なる現在だけではなく、いつも過去と共存する現在である。

芭蕉の天和二年冬の作、

芽舎買水

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり　『虚栗』

もこういう表現のしかたを取っている。これは深川の芭蕉庵に入って間もない頃の作である。前者の芽舎は深川の芭蕉庵であって、「買水」とは当時深川の地は水質が悪く飲料水は買って飲んだのである。「偃鼠」はどぶねずみのことである。これは『荘子』の「逍遥遊篇」の「鷦鷯巣林、不過一枝。偃鼠飲河、不過満腹。」による。一句の意味は草庵のわびしい生活は、買っておいた水も氷ってしまった。その氷を一片口に含んでやっと咽のかわきをとめたものの、何かほろ苦い味である。あのどぶ鼠が河の水を飲んださまにも似ているよ、というのである。あのどぶねずみは河の水をお腹いっぱい飲んだだけで、満足している。芭蕉も一片の氷で咽を潤すことができることに満足している。しかし、芭蕉は、自ら進んで選んだわびしい生活にほんとうに満足しているのであろうか。満足しているとすれば、「氷苦く」というのではなくて、「氷甘く」というはずである。芭蕉は「氷苦く」によって、どのような心情を伝えようとしたのであろうか。この「芽舎買水」という句は天和元年冬に作られた俳文「乞食の翁」に収められているが、この俳文は、通俗的な宗匠生活を捨てて、深川の草庵に入り、みすぼらしい生活を体験して、「その佗をはかりて、其楽をしらず。唯老杜にまさる物は、独多病のミ。」と言われるように杜甫のわびを追求しているが、そのわびにある楽しさがまだ分からず、非常に悩んでいる芭蕉の心情が描かれている。芭蕉は「氷苦く」によって、苦悩している心境を告白しようとしたのであると思う。

ところで、「芽舎買水」の「買水」は、すでに「二」において挙げた杜詩「引水」における「沽水」という詩句を連想させる。明の王詩㸃の『杜臆』では「引水」について、次のように解釈している。

雲安沽水、謂買水。不曰買而曰沽、蓋比水於酒。而遠未易致、故奴僕為悲。篇末「斗水何直」謂水不直銭。総是水不須沽也。根上「沽」字、因用「斗」字、而又以「斗水」起下「百憂」。此運筆之巧。水不須買、既不費銭、不煩心力、不労奴僕。此留滞中之一適也。故云「百憂寛」。

所云「生理難」、不止言水。水可寛憂、則憂之不能遣者多矣。

すなわち、雲安沽水とは水を買うということである。「買う」と言わないで、「沽ふ」と言うのは、思うに水を酒にたとえているのである。また、道が遠くて、たやすく買ってこられないので、奴僕は悲しんでいた。詩の終わりにある「斗水何直」は、水は値打ちがないことを言う。つまり水は買うものではない。「沽」という語にもとづいて、「斗」という語を用い、そして、「斗水」を用いて「百憂」を引き出す。これは運筆の巧みさである。水を買う必要がなくなって、お鐘はむだ使いしないし、心力を煩わさない。そして、奴僕を疲れさすこともない。これは他郷に滞在している時の一つのやすらぎである。それ故に、「百憂寛」と言う。「生理難」というのは水のことだけではない。水は憂いを寛がせてくれるけれども、憂いの払えないものはまだ多いということである。

王嗣爽の言うごとく、「沽水」はつまり「買水」のことであって、芭蕉の「買水」と意味が同じである。そして、雲安は山地なので、井戸を掘ることができなくて、水は遠い所から買って飲む。芭蕉の深川の草庵はどのような状況であったのだろう。そこは低湿の地で海に近く、水質が悪いため、飲用水はわざわざ買い求めたのである。いずれにせよ、水は買わなければならないのである。また、杜甫は夔州に引っ越しても、水は相変わらず乏しいが、買う必要がなくなって、「此留滞中之一適也」と一応満足する。一方、芭蕉は買って置いた水は氷になって苦いけれども、咽のかわきをとめることができて、満足する。この二人の、ちょっとしたことで、先ずは満足する精神はよく似ている。芭蕉は「引水」詩を読んでいたにちがいないし、二人が置かれた乏水の客観的な状況もよく似ている。そして、主観的に見れば、二人は知足の精神の面ではつながっている。知足の精神は老荘にさかのぼることができる。杜甫も芭蕉も老荘の思想に親しんでおり、老荘の精神を受け入れる面では二人つながっているのである。

○ まとめ

「権七にしめす」と「示獠奴阿段」との内容的な関連を具体的に実証してみると、まず、両者は地理的な状況がとても似ていて、どちらも乏水地帯だということが分かった。そして、登場人物の阿段と権七は類似点が多い。二人とも名もない奴僕であって、漂泊者のイメージがはっきりしている。芭蕉は杜甫、阿段、杜国、権七を漂流者として、見ていたようである。以上のような共通点によって、芭蕉は杜甫の「示獠奴阿段」を鋳型にして「権七にしめす」を創造したのであろう。

芭蕉は杜詩「示獠奴阿段」のテーマを模倣して、俳文「権

七にしめす」の題目をつけたのである。両者は目下の下僕に「示す」という点では一致している。そして、芭蕉は杜詩の「稚子尋源獨不聞」と「曾驚陶侃胡奴異」を踏まえて、杜国の下男の権七のことを書いた。これは典拠を引用して人物を描くという杜甫が使った表現法を受け入れたのである。典拠を引いて、「古を以て今を証する」という伝統的な表現の方法は自分が古人と同じ主張、思想を持っていることを示すのに使う。この手法によって、芭蕉は自分が杜甫と同じように、すぐれた人間は身分の貴賤によるのではなくて、その心によるのであるという世界観を持っていることを言い表そうとしたのである。この身分を超えた精神は杜甫と芭蕉をつなぎあわせたのである。以上は芭蕉は杜甫から継承したものである。次に、芭蕉は杜詩を継承したうえにさらに自分なりにいかに俳諧に生かしたのかを見よう。文章の構成の面において、杜詩の「示獠奴阿段」は一段構成からなっているのに対して、芭蕉はさらに広げて、「権七にしめす」を二段構成にしたのである。これは芭蕉が意識的にしたのである。「示獠奴阿段」は主人すなわち作者本人が自分の奴僕——阿段に「示した」ものであるが、「権七にしめす」は作者芭蕉が愛弟子の杜国とその下男——権七に「示した」ものである。両者の構成は異なっているから内容ももちろん同じではない。「権七にしめす」は「示獠奴阿段」の獠奴阿段の功労を賛美したことを踏まえて、下男の権七のことを誉めたが、「下位に有ても上智の人あり」を借りて、杜甫よりもはっきりと人間を身分の貴賤をとわず、その品性によって見るべきであるという世界観を言い表した。また、自分の弟子——杜国に対する同情、慰め、励ましも書いた。漂泊者である芭蕉は不遇になって、漂泊している人に対する同情の態度を表そうとしたのである。